
とある奇妙な錬金術師 《アルケミスト》

AITRUST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある奇妙な錬金術師^{アルケミスト}

【Nコード】

N7615Z

【作者名】

A I T R U S T

【あらすじ】

俺はどうやら『とある』の世界に来てしまったらしい。

危険な原作に関わらずとも、科学技術の発達した学園都市で、しかも超能力まで使えるなんて嬉しいにも程がある！

そう思っていたんだけど……。レアで奇妙な俺の能力、錬金術は^{アルケミー}とんでもないモノを錬成してしまった。

俺はこれからどうすればいいのだろうか……。

ブログ（前書き）

気分転換に投稿。 適当更新予定。

プロローグ

デジタル時計の表示が、夏休みの始まりを告げた。

正確には一学期最後の学校が終わった時点で夏休みが始まったとも言えるのだが、重要なのはそこではない。

肝心なのは今日が夏休みの初日であることだ。

とある不幸な少年にとって運命の日。

俺にとっても、今後どのようにしていくのかを決めるターニングポイントとなる日だ。

原作に関わっていくのか、関わらないのか。

まあ、物語のはじまりは今日の朝から始まるし、途中から介入することもできる。だが

隣で眠る少女を見た。

とても幸せそうに眠っている。余程いい夢でも見ているのだろう。

勘違いしてもらっては困るが、俺と彼女はそんな色っぽい関係ではない。俺が彼女の保護者と言う関係だ。

高校一年生の俺が保護者といっても、可笑しな話だがそれだけの理由があつてのことだ。何より彼女は見た目よりずっと幼い。

容姿の方は……、誰に似ているとか言えれば楽だが、それは本人らに失礼にあたると思うので言わない事にする。

人によつては俺に似ていると言つたりするので言いくいが、結構可愛い顔をしている。まあ、当然と言えなくもないが……。

普段はポニーテールにしている髪は、諸事情により染めている。

色は言葉で説明しづらいが、オレンジっぽい濃い金色だ。その際、『髪を傷めない新技術』のテスターになれたため、お金がかからなかった上にキューティクルも守られた。

いや、髪がサラサラしていて気持ちいいのはとても喜ばしい事だが、今は関係ない。彼女の容姿が可愛くなかつたとしても、その存在が唯一無二であることに変わりはない。……そのはずだ、俺はそこまでゲスではない。

要は俺にとつて彼女は大切な存在だということだ。補足しておくが、これは恋愛感情ではない。家族愛のようなもので、妹を思う兄の心境だ。

おっと、また話がずれた。一度整理したほうがいいな。

選択肢は二つ。

危険を冒し、気のいい友人である少年を助けに行く……、つまり原作に介入すること。

もしくは彼を見捨てること。介入さえしなければ物語が丸く収まるのは間違いない（はず）だろう。ただし、その過程で少年は傷つき記憶を失う。

……こんなことなら、彼に関わらなければ良かった。ついそんな現実逃避がしたくなる。

天秤に掛ける。彼女か、彼か。
結論を出さなければならなかった。

「あいつにはあいつの物語がある。俺には俺の物語がある」

それでいいじゃないか。

その問いに答えるものはいなかった。

プロローグ（後書き）

ちょっとテンプレ転生に反抗してみる。

学園都市生活（前書き）

ちよつと最初の方は早めに更新しておきたい。

学園都市生活

突然だが、俺はとあるの世界にいるらしい。とある世界ではなく、『とあるの』世界だ。

魔術と超能力が飛び交う世界。その渦中である学園都市だ。

おれがそのことを知ったのは、小学生程度に若返るといって『コナ君体験』をして目を覚ました妙に近未来的な病室で、カエル顔の医師に会った時だ。それを見たとき、俺は疑うという感情が吹き飛んだ。

身に起こった不可思議の連続に戸惑う俺を見た医師は、記憶の混乱だろうと当たりを付け、俺のことを一から説明してくれた。

名前は御堂進みどうすすむ（これは前と同じ）小学6年生（やっぱり若返ったらしい）。後は学校だったり、身の上チャイルドエラー（置き去りらしい。本当にそうだろうか？）の話だったり。

適当に演技して、記憶障害が置き去り特有の人体実験であるように匂わせていたら、なんと身柄の保護をしてくれるという。

流石に悪いと思ったが、良心的な人の元に居なければ本当に危ないことになりかねないので、一応書類上だけはそう言う扱いにしてもらった。一人暮らしはできる。

そんなこんなで多少の混乱はあったものの、物語の始まり自体は平和に始まった。

元々高校生だった俺は今更小学生の勉強とかwww。とか考えていたが、その考えは余りにも甘かった。

小学生はまだいいが、それでも内容の高度さが異常だ。中学生になったときはもう、周りの生徒とのアドバンテージは無くなっていた。少々ムキになって勉強したため、成績は悪くなかったが。

勉強もできるよくなれば楽しいものだ。前の世界では嫌いだっ
たが、きつと授業内容カリキュラムの違いが原因だろう。

後は超能力の存在か。要はモチベーションの有無なのだ。

勉強が出来ても能力が高いとは限らない。だが、能力が高い人は必然的に勉強ができる。例えば空間移動テレポートには1次元演算が必要になったりと、能力の制御には高い知能が要求される。例外なのは第七位くらいだろう。

逆に、『一人間では世界の真理は理解できないが、人間を超越した存在となれば真理に到達する事ができる』《SYSTEM》『というくらいなのだから、能力開発することで知能は否が応でも上がらずにはいられない。

それで俺の能力なのだが、名称を『錬金術アルケミー』と言う。命名は俺自身だ。

いや、なに。『鋼の錬金術師』に出てくる錬金術にそっくりなのだ。原料を用意し、錬成陣を書いて、理解、分解、再構築する。まさにそのまんまと言っている。俺の声がアルフォンス（CV・釘宮）っぽいのは偶然であって欲しい。

俺が長年疑問に思っていたこと。錬金術って全然等価交換してな
くね？ と言う疑問が一応解消された。

具体的に言うところ……ダイヤモンドを例にしよう。ダイヤモンドは
炭素の同位体なので、簡単に錬成できる。

炭素 \parallel ダイヤモンド（炭素+価値）

うん、これでは式が成立しない。炭素がダイヤモンドへと変わる
ために必要な圧力と時間だ。^{エネルギー}つまり、

炭素 \times エネルギー \times 時間 \parallel ダイヤモンド（炭素+価値）

このかかった時間とエネルギーがダイヤモンドが持つ価値へと変
わる訳だ。

価値を生み出す事は錬金術の真骨頂だろう。だが、錬金術はこの
エネルギーと時間を無視している。

最も、不思議な力が働いてと言われればそこまでだ。そういえば
『鋼の錬金術師』では地脈の流れとか言っていた気がする。まあ、フ
イクションだもんな。疑問なんて最初から無かったな。

結果的にこうなる。

炭素 \times 超能力 \parallel ダイヤモンド（炭素+価値）

さらに詳しく言うと、中一の終わりの身体検査で^{システムスキャン}2m \times 2mの大
きさの錬金に成功した。先生曰くレベル3は固いという。

しかし。

俺の学園（都市）生活が平穩だったのはその時までだった。

学園都市生活（後書き）

この時点での進の能力は、

- 2 m x 2 m サイズの錬成。錬成陣が必要なため準備に時間がかかる。得意分野に関しては不明、割となんでもいけそう。暫定レベル
- 3。

一番会いたくなかった人（前書き）

投稿してみしてから改めて禁書の人気に驚かされた。かなり初期のころから愛読してきた身としても嬉しいです。

一番会いたくなかった人

あ、ありのまま、今、起こったことを話すぜ！

突然見知らぬ空間移動能力者に拉致られ、

学園都市の上空を絶叫マシンも真つ青の恐ろしい速度(?)で飛び去り、

気づけば窓のないビルで学園都市統括理事長、もと世界最高最強の魔術師にして現世界最高の科学者。アレイスター・クロウリーと対面していた。

学園都市の暗部とかそんなチャチなもんじゃねえ、もっと恐ろしいもの(r y

「君は何者だ？」

「へ？」

「君は何者だ、と聞いている。君には過去がなく、忽然とこの学園都市に現れた」

確かに、俺は突然この世界に来た。学園の学生の身分は存在したが、俺は転入生扱いで学校に行った。あの病室で目を覚ました俺は、そこに至るまでの過程を知らない。

「記録的には君は確かに存在している。だが、私は『見ていた』。君は今までこの学園都市には居なかったことを」

『見ていた』確か滞空回線アンダーラインとか言う監視網だったか。だがしかし、それならなぜ一年以上もの間放置されていたのだろうか？

「……答えない。もしくは自分でも分からないのか。まあどちらでもいい、本来なら取るに足らない存在だった」

正直、なんと返事をすればいいのか分からずに黙り込んでいる俺だが、相手の返事は的確な部分を着いていた。

「だが、君は思いの外面白い能力を持っている」

……俺の様なイレギュラーでも、関係は無かった。それがプランとやらを進めるのに利用できるのであればなんでも使う。そう言う奴なのだ。

「その力で人体錬成を試してみてくれないか」

一番会いたくなかった人（後書き）

ちょっと短いですが。

アレイスターの口調がわからん。

真理（前書き）

ちょっと早足で。

真理

「条件を付けます。まず、このような話は今回限りです。暗部との関係は無しにしてもらいたい」

「いいだろう」

「二つ目に、俺の能力は準備が肝心です」

「心得ている。原材料は既に用意してある」

「知識も必要です」

「資料も揃えてある」

「……最後に、この練成は必ず失敗すると思います」

「やってみなければわからない」

「……失敗した場合、リバウンドと言う……言わば能力の暴走が起る可能性があります。その際の処置をお願いします。まだ、死にたくはありません」

「私を信用できなくても冥土ヘウンキヤンセラ帰しの腕なら信用できるだろう？」

「ええ」

俺が学園都市にいる限り、いや、学園都市を出たとしても、この強大な影響力を持つ人物から逃れることはできない。

それが分かりきっていたから、俺は取引した。

運が良ければ手足の一本で安全が買えるだろう。

そして俺は人体錬成に挑み、真理と、俺の能力の本質を見た。

『馬鹿だな、知っているのに来たのか』

目を覚ますと病室にいた。一年前に見た光景のデジャブだ。違う
点は、少し成長した体で、

右手と、

左足が、

持っていかれていた事だろう。

真理（後書き）

持っ ていかれたのが右手左足な理由は鋼練に合わせたのではなく、それなりに理由があつてのこと。別に左手右足でもよかつたけど、混乱しそつだしそのままにしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7615z/>

とある奇妙な錬金術師《アルケミスト》

2011年12月28日00時55分発行